

以百尾
七
孫玉胡蝶
夏
貳

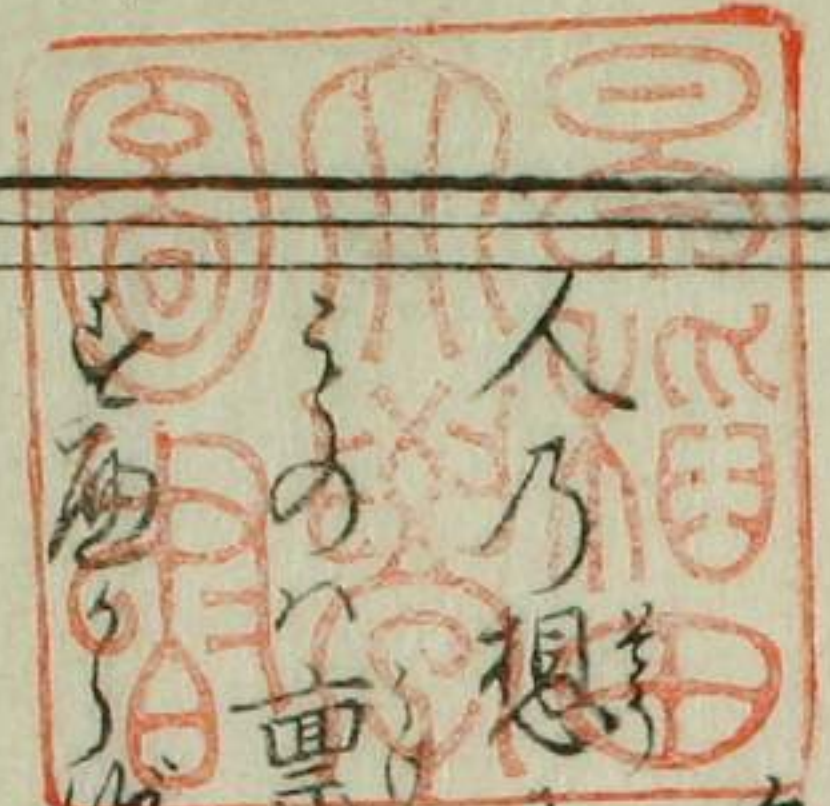
特
へ遠13
960
2



13
960
卷 2

本清

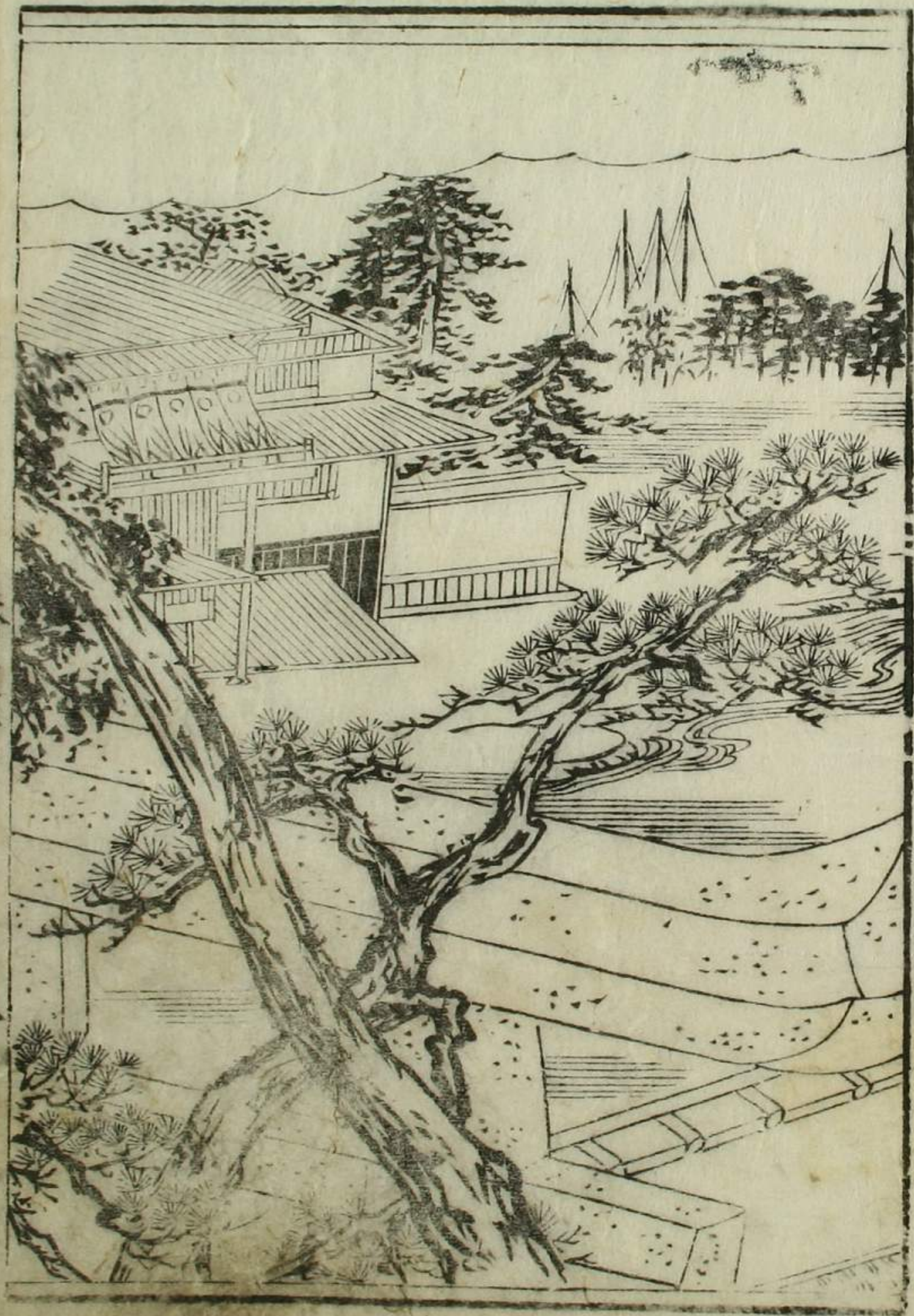
繪本胡蝶夢卷之二



油屋武清つがき縦放つがき不行金まのこと賄まのこて於まのこてとこみ
 久まのこき清賄まのこと悦まのこて竊まのこに於まのこてと嫁まのこをんと約まのこす事
 人乃まのこ想まのこは善惡まのこ乃九相まのこありそ争まのこ奈まのこと為まのこべりさる
 とあり稟まのこ得まのこる所まのこの生貨まのこふれむさといんまのこ些まのこも
 とありまのこひぬと悪相まのこの相まのこありとも常まのこはまのこ教まのこ
 とあり人と交まのこりて能まのこく和まのこく能まのこく護まのこる人まのこ誰まのこか
 や常まのこよことと縦放まのこする所まのこの生貨まのこ乃悪相まのこ之まのこり
 一まのこ現まのこきて為まのこふ不まのこ就まのことまのこ変まのこ因まのこ外まのこよ出まのこて人まのこよ忌まのここ

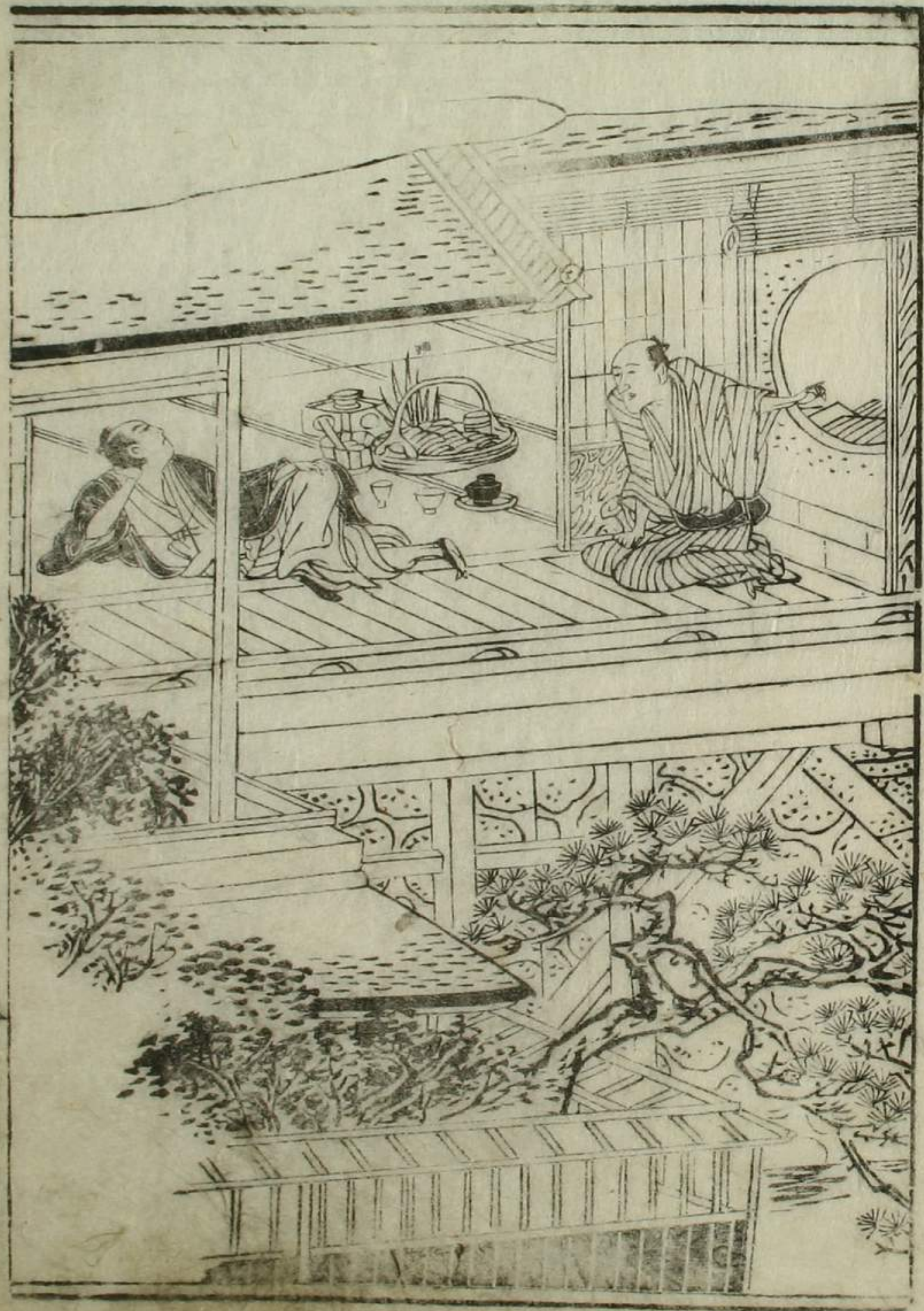
遊あそぶあはふれ志こころれも自己おのれの其その神かみなる事ことと
次つぎいんとおれを我われよりかて外ほかに制せいとふとのたゆ
かり土ち豪ごう富ふ有ある乃すなはち人ひと乃すなはち家いへの子こは有あるものなり油
を武ぶを清せいの原はらより富ふ有あるよ生あれ飽あ食く煙えん衣いよ音おとる
者ものなれと人ひと表ひたも終はく脊せ言ごく膚かわ白しろかして面おもて祈いのも
具ぐ足あし一ひと常とこよ上かみ田で八はち丈じゆ結むす城まつ純じゆんとよまよと男おとこ自みづか
負おんの由よし有あ愧がよて喝がく然ぜんとて贅ぜいと浪なみり謙けんとほこ
酒さけと銀ぎんのやう色いろは礼れいを音おと樓ろう花げ街がいは俳はい個ごして粹すいと
辨わと通とと論ろんと伎ぎ婦ふと詰つり鴉あ母ぼと屈くせ音おと言ご

舞まを春はる酒さけよ喧けん嘩かとよ一ひと那な一ひと箇かんとて愛あいを
辱おとしと下くだりて這こゆよ春はる城まつ遊あそ廓くわくよふれとも人ひとよ忌き
あくと仇あ讐しやう乃すなはちわい志こころれ也なりも金きん銜げん悪あく馬ばと駐とどめ
金きん鑄てうよ堅かと射やる奈なせん財さい用ようのそと醜みにくしい
志こころも又また筆ふで奈なとも為なる酒さけ家いへを樓ろうの服ふくも衣い
なり這こ故こよ垂た威いをと振ふるひ六む國こくハ猶なほ我われが魔ま下したよ
ありと贅ぜい一人ひとりの多おほと得えけ口くち舌しやうと峻げんけ人ひとと信しんを
喉のどに縦た脱だつよ遊あそ里りと横よこのせり後のちよ武ぶを清せいかぶる
乃すなはち音おと樓ろうへ人ひと皆みな行ゆくと止とどめと音おと樓ろうも又また門かどと



聞て癩人らうじんと忌おそり如ごとくせり鐘かねと室中むろちゆうに撃うて其音そのね四
 方あつちに響ひびく誰たれもとなく沖おきを武ぶ士し流りゅうハ刀やいば技わざ不行ふじやうの
 者ものかりし人ひと避ひて交まじるものなく況いはや縁ゆかりと結むすび婚い
 とそとびるものあんなや此こゝゆへは八百屋やちひやくの娘むすめは婚い
 求もとんと計はかり較くらふふものたり油屋あぶらや武ぶ士し衛ゑいハ三さん日にちハ八
 百屋やちひやくもゆらぐらう〜この日このひ遊あそ興こうのゆりよそと代しろ惣そう
 玄げん法ぽうと其その店みせ頭かみはゆらゆら腰こしに茶ちやと乞こひ烟たば州しゅう
 兩りゆう三さん管くわんと吹ふき悦よろこ惚ぼと娘むすめ乃なり風ふう姿さと眺ながて左右さうぶを
 進すすめ久ひさま流りゅうもおされを不ふ興こうして去さるとはれ女め房ぼう

今いま釋しやく〜今日けふハ折おわ〜く久ひさま流りゅうハ他た行ぎやうをれと再また度たび
 流りゅうもゆらゆらと立た送おくる帰かへ〜り武ぶ士し流りゅうハ別べつに側わき町まちの行ぎやう
 戸りやよ入り酒さけとあさせ一いち兩りゆう蓋さんと歴かして惣そうま流りゅう汝な見みずや
 娘むすめ子の風ふう姿さ本ほん綿わた乃なりあ翼よくといふ〜と翻ひらく鳥とりと
 して細こ腰こしま〜柳やなぎのわ〜艶えん顔がん鮮せん妍げん〜と楊やなぎ蛾が咲さ
 と合あひ滅め〜今いま時とき乃なり風ふう流りゅう千せん金ごん買かたり我われ是こゝに
 十じゆふ不ふ持もちり〜你おまえおる不ふ来き〜バ白しろ銀ぎん百ひやく兩りゆうを興き
 一いち〜萬まん空くう流りゅう乃なり才さい奇きをゆ〜と裁ざい娶よめらるあんなやいあや
 惣そうま流りゅうを傳つたへさ〜是こゝ且かつ流りゅう〜と久ひさま流りゅう道みちを



久壽
油屋
詰
詰

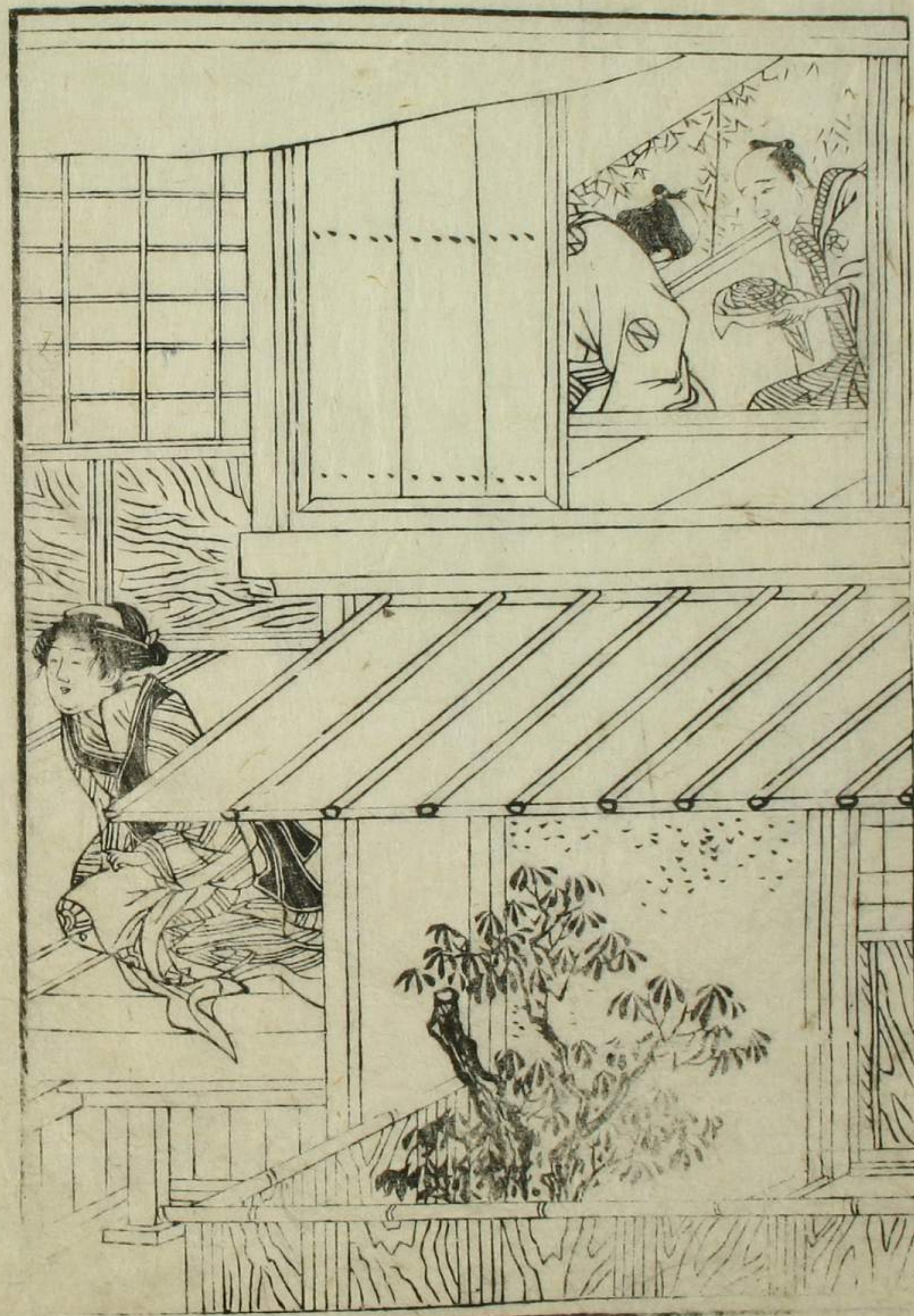
卷之三

母也を氏と名を命を分り思量好むむめあひの貪
 あふ却く心易くしし事ありあうしとの事あり
 分りあふりあふりあふり些些失礼あがり慈父のたふ
 はずづ福徳の三年のとるその疾ゆきも
 く内室あを悦しめ後へあせしもの春花の娘
 男あり有財幾刻を完くましく應報せしむ
 こと偶蹇擅く言りくおれ久き善も憶徳死分
 説といふも胸裏計較事ありしとて止了
 べ記あもあふて轉くの内帯儼尚以者觀のむし

とうろく形いふあしするありとてさすし譜
 ひ連蚕身ハ分ハ就たりと大不悦い足をきや
 多く私宅へ立ゆりりるおれ家内のその怠屋
 ら人逸興の氣よお拳くはあし居りる久き
 最善首尾ありとたれを寝寝を諭し居たりし不
 婢女り扱お咲ひしつゝあそをせおハ邪思ふ男も
 儘有があふあを那の油屋氏と名とやとつゝ人色も
 白し男もはしとてふかあとの雜もありし肺腫
 かつりやあ驕謾容頃日かく三四度もあおひく

お七を元のあつちと邪忌目つひきう〜
 居ま〜たが儘油屋お嫁にこそを貫ふといひてさう
 だ〜お七を何あ〜どふあ〜と〜
 這我大事と控も耳を凄〜立用居りうがお七
 のりふた〜も貫万貫の身家めて〜と氣は普ぬ
 西配事ハ忌又怎麼貪ふ〜して〜たが〜
 深〜お七の心は信やうある〜
 け那の油屋お七を信配面観る事〜邪忌
 ひと立安く久き事胸算さ〜粗語と控も心

をとり〜娘かく〜忌嫌〜
 生之祖の遺蹟立〜
 時乃之清命あ〜
 何ろ小今油屋の油屋嫁と〜
 是の〜人や嗜不嗜〜
 た〜親の爲賺〜
 を苛ち胸の火を消す〜
 一人娘のお七を〜
 何ろお七を〜



八百屋久き集賄金をゆき堅く強す
其夜失火しく家内吉祥候存り

富く奢りぬハあく貪しくと誦ぬゆふし久き者ハ
萬望娘を油屋へ配し素の資給すくと込主二人
の義理をこてにくと區く心を費しりるとととも
おの光景そハ中く得心も做まぐ右と申左や
おの煩り中油屋に代あき入来りりるゆ
家内の主人事を怕もやぐ二階へ誘ひ茶畑を
を薦久々き者只觀候を屈しくあきききと誦

居りりるが思き懐中より階金三十帖をとりぬ
通日結納もききすべりもとやん夫止の雜費資
用も有べりも下儀等が寸志も東道より送るも
候り所あり僅不足の者も何れ復り越す
と昂然とくときとて禮不ト申もハ久き者ハ金
と見るゆり雀躍身を轉トとおし裁きおき婚
配も半ありさる不救十帖金玉海より小き者
ありし妻系お悪く不使しと申し居りハ
近日得たりきめや葉おもと怪せりし否のあハ

若お新らるるしく山田護源入る所ありと云巧
 小おおき信も業坊のてゆきく此上跡畧のあり
 ありりもとも一日も速く回詞せしよと言葉の
 こくく取りりる這渡溪を書とお七いさうゆきを
 且訝しく障子陰けり立笑しく妻も娘も大小
 おど後死おそ我一人の娘子を牲おしく金まね
 んとい夫あかしくも浅猿の心やと泣入お七を宿し人
 ずりしゆくす氣つめあまおしゆくす連も何の通
 此おの金すてとろくくいの事今さくく忌といさり

とてよもや遣ぶおいおく海じりもへとて有竊小這の
 家を立退葛西おハ先久た更どの取縁も何れ
 そまをきあましくげ雅を趣も油屋へいひぬうま
 母おしく一葉もべらもいぬくお深く歌くへかす
 と象常の物おど治けり一途も逃お人し象しりる小
 至久を書けり形象をそや知らとらふやまははし
 小扱をゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 中あり南斗低ぬくち門戸も裏面を用く言
 儻門へあるその何ハ儻小言えくやよあど妻娘お



きけうし不喚^{よび}あし^しく^くそ^そ他^たも^も極^{ごく}く^く臥^{ふし}寓^い入^いり
 火^ひ盛^{さか}人^{ひと}あ^あも^もあ^あを^を燥^{くさ}し^し水^{みづ}盛^{さか}人^{ひと}か^かれ^れ又^{また}う^う
 火^ひを^を消^けす^す水^{みづ}火^かは^は刻^{こく}も^もあ^あく^くて^てい^いあ^あら^らざる^{ざる}物^{もの}あ^あま^まえ
 元^{もと}ら^らと^とい^い災^{わざい}を^を生^{せい}ず^ず既^{すで}よ^よその^{その}あ^あも^も且^{かつ}沼^{ぬま}頃^{ころ}母^{はは}と
 娘^{むすめ}ハ^ハ霄^{せう}より^{より}此^{こゝ}憂^{うれ}悲^ひ小^こ女^めも^も寤^ねも^もも^もに^に聴^きく^く
 て^て睡^{すい}眠^{めん}中^{ちゆう}廂^{しやう}の^の檐^{えん}は^は火^か火^かあ^あら^らお^おり^りも^も軟^{じやう}風^{ふう}の^の
 烈^{れつ}しく^{しく}と^とわ^わら^らう^うと^と燃^もゆ^ゆし^し何^{なに}程^{ほど}と^とあ^あま^まこ^こら^らや
 火^か事^{こと}と^と操^{さう}び^びと^とち^ち母^{はは}と^と娘^{むすめ}の^のこ^こを^を扯^ひく^く倒^{たふ}す^す轉^{ころ}
 迎^{むか}へ^へる^る久^くき^き喜^きハ^ハ一^{いつ}心^{しん}不^ふ覺^{かく}金^{かね}を^を切^きと^と腹^{はら}こ^こら^らに^に

大^{だい}音^{おん}少^{せう}と^と妻^{さい}子^しを^を吸^すく^く疾^{とく}走^{さう}よ^よ疾^{とく}お^およ^よと^と喚^{よび}り^り
 其^{その}刃^{やいば}ハ^ハ垂^たり^り佛^{ぶつ}り^り小^こ飛^{とび}入^い祖^そ師^しの^の手^てを^を搭^{ひんが}抱^{かか}帳^{ちやう}面^{めん}
 を^を小^こ提^たく^く表^{あは}の^の方^{かた}へ^へ逃^{にげ}あ^ある^る杖^{つゑ}を^を人^{ひと}ハ^ハ急^{いそ}氣^きと^と友^{とも}
 肉^{にく}弟^{てい}と^とお^おを^を先^まへ^へ小^こが^がし^し我^{われ}他^たハ^ハ活^いは^は残^{のこ}り^りと^と言^いふ^ふ
 を^を何^{なに}け^け小^こ袖^{そで}七^{しち}ハ^ハ裏^{うら}袂^{たもと}あ^あか^から^ら脊^せ骨^{こつ}小^こ負^お母^{はは}子^こを^を某^{たが}
 て^て駈^{かけ}あ^ある^る沙^さ々^さハ^ハ強^{かぢ}力^{りき}手^て小^こ當^あら^らを^を幸^{さい}小^こむ^むせ^せう^うと^とい^いふ^ふ
 菟^う也^やも^も早^{はや}四^し方^{ほう}小^こ火^か也^やり^り八^{はち}九^く折^{せつ}の^の延^{えん}焼^{やう}あ^あま^まと^とい^いふ^ふ
 く^くも^も強^{かぢ}救^{きう}火^か也^や中^{ちゆう}不^ふ燃^もり^りハ^ハ志^しと^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ
 ハ^ハ抵^{たい}塵^{ちん}灰^{かい}も^もあ^あら^ら九^く燒^{やう}は^は火^か許^この^の事^{こと}あ^あま^まと^とい^いふ^ふ

宿老^{しゆくろう}り結正^{むすむす}の先^{さき}菩提^{ぼだい}所^{しよ}へはるひ退^{たい}ての^{この}波^{なみ}は
を待^{まち}た後^{あと}と肉^{にく}意^いふ^ふの久^くき^きあ^あは^は音^ね律^{りつ}律^{りつ}
り^り這^こ刻^{とこ}油^{あぶら}屋^や氏^{うぢ}を^を流^{なが}ハ^ハ久^くき^きあ^あは^は九^く燒^やは^はあり^{あり}親^{おや}子^こ
夢^{ゆめ}く^く不^ふ迷^{まよ}ひ^ひあ^あら^らりと^と字^じ死^し竊^{ひそり}に^に惣^{そう}を^を流^{なが}ハ^ハ嘔^{おう}吐^と
く^く尋^{たづ}子^こ探^{さが}し^しと^と杜^とと^とへ^へ那^な里^りの^の租^そ房^{ぼう}へ^へあり
とも^{とも}情^{なさけ}を^をあ^あげ^げて^て入^い直^{ちやく}へ^へお^お供^けより^{より}あ^あり^りと^と母^{はは}は
金^{かね}を^を夢^{ゆめ}へ^へ幸^{あき}小^こ娘^{むすめ}を^を諄^{しん}々^{ぜん}と^と我^{わが}地^ぢの^の念^{ねん}を^をて
ら^らず^ずし^し這^こ拳^{こぶし}止^とし^しと^と不^ふ定^{ぢやう}て^て嫁^{よめ}入^いれ^れと^とて^てい^いふ^ふ
と^と母^{はは}親^{おや}地^ぢの^の巨^{こゝろ}得^{とく}お^お何^{なに}と^とハ^ハ誠^{まこと}と^とい^いふ^ふは^は

然而^{しかるに}而^に向^{むか}久^くき^きあ^あは^は夫^{おつと}婦^{めかけ}の^のそ^その^のへ^へた^たの^のあ^あり^り不^ふ普^ふ法^{ぽう}法^{ぽう}を^を
て^て安^{やす}慰^いよ^よ仕^し込^こに^には^はは^はあ^あバ^バ渠^き渠^き等^{とう}が^が十^{じゆ}分^{ぶん}あ^あり^りと^と必^{かならず}ず
失^{あきら}言^ごを^を做^あ果^{くわ}了^{りやう}と^と自^{おのれ}己^の外^の袍^ほも^もま^まく^く脱^ぬぎ^ぎと^と興^{きやう}
ハ^ハ惣^{そう}を^を流^{なが}ハ^ハ小^こい^いま^まを^をあ^あら^らし^し一^{いつ}斯^{しか}有^あめ^めと^と一^{いつ}と^と尻^{しつぽん}の^の
捲^ま考^{こう}し^し逃^{のが}が^がこ^こと^と不^ふ走^{そう}り^りゆ^ゆき^き那^{そこ}里^り這^こ里^り尋^{たづ}搜^{さう}し^しる^る
小^{せう}洲^{しゆ}と^と刀^{たう}を^を回^{まわ}り^り夫^{おつと}と^と刀^{たう}を^をう^うり^り物^{もの}を^を流^{なが}ハ^ハ小^こ洲^{しゆ}を^を屈^{くつ}
免^{めん}令^{れい}秋^{しゆ}と^と相^あく^くと^と有^あハ^ハな^など^ど惣^{そう}を^を流^{なが}ハ^ハ急^{きやく}を^を変^かへ^へて^て
か^か一^{いつ}畏^{おそ}難^{がた}あ^あら^らし^し入^いれ^れと^とあり^り就^{すなは}ち^ちハ^ハ斯^{しか}ハ^ハお^お内^{うち}を^を連^{れん}
乍^{しや}取^とり^りツ^ツこ^こと^とは^は控^{くわう}や^や主^{しゆ}人^{にん}武^ぶを^を流^{なが}ハ^ハ属^{ぞく}ハ^ハ存^{ぞん}は^は存^{ぞん}は^は存^{ぞん}は^は



小潔素素ある相房をあるも山徳引やへと言屬
 にもいふらんく這もく入下るべくと俄態
 痴呆丁寧母は云軟く山と人とのつ怪みそ
 八と今下りて久きふも不慮の変ふ今時
 菩提と吉祥誤へ落る私ともいふ心あへ
 ちやねが原因をある下りて人成と云ふは
 く山れ下りて言はるは左様あり
 山内弟は右も左もお毛とのハけ頂久き山と
 江戸交をたもて必是け方へ通曉し有へ

浪籍少とあるは山徳引やへと言屬
 小逆中とあるは山徳引やへと言屬
 を何ともしおとする首頸挿て擲のくは物
 あつと滅し姑脇に山徳引やへと言屬
 の途中にて狼籍をのふ合畏難く山徳引やへ
 援りて山徳引やへと言屬
 長根携りて捕巡ハ斯ハ協トと惣をハ逸足た
 しく逃去らん

